

## 第 2 節 未来型のこどもの情報モラルと促進法(およびその指導力養成に関する研究)

大西 文行

### 要約

情報モラルの促進について、モラルと道德性についての先行研究を概観し、自他との関係でのモラル、道德性を考察した。

研究対象年齢である、幼稚園・保育園児および小学校低学年への道德指導内容について分析した。

情報環境でのモラルでは、情報送信者と受信者のモラルについて考察し、幼稚園・保育園児および小学校低学年、保護者、保母、教諭および保母や教諭に対する情報モラル発達促進法について考察した。

### キーワード

こども(幼児・児童)・道德性、モラル、道德的判断、共感性、向社会性、情報過程、情報モラル、未来・能力・指導力、地域との連携

#### 1. 研究の目的

未来型子どもの情報モラルとその促進法について、情報モラルについて考察し、情報モラルの発達、促進法について考察する。

#### 2. 道德・道德性について

##### (1) 道德について

人間は動物であるが単なる動物ではなく、動物には見られない理性をもった理性的動物である。人間社会はこの二面性を統合する文化化の生活である。

道德(Moral)は、自然、動物的な生活では存在しないために、人間として道うなければならぬ道として、さらに社会的動物として、対他関係で生きるために自他が共同的、社会的に生きる道として創りだされた。道德は人間の精神と自然との統一的存在として、社会生活を生きるために創りだされた生活の規範といえる。

道德においては、人間の二面性は、社会的自己と個人的自己、または利他的自己と利己的自己である。それらの対立葛藤により日常態が崩壊し、日常的自己は本来的自己に、無自覚的自己は自覚的自己に、慣習的自己は道德的自己に高揚し、真の道德が創造される。本来の、自覚的な自己は理性的自由に生き、道德自己は道德意識に生きることができ、それらは道德の成立の根拠となる。自由は、理性的判断の基づく選択の自由であり、自然の決定を超え、あるべきもの、あるべからざるもの、善、悪が生じて、道德を成立する基礎となる。また道德意識は、善悪を理解し判断する道德的知性、善悪に感じる道德的感情、善を意欲し悪を拒否する意志の総体であり、これが機能することにより、善悪の判断、善の選択、その実現が可能となり、道德が成立する。

道德は、自我の内面に生じる私的自己と社会的自己の葛藤を通して高揚する自覚的自己の自由、道德的自己の道德意識に基づいて成立する行動規範であり、自己が主体的に創造する道であり、

客観的なもの、あたえられたものではない。個人が存在する社会自身には、主観を超えた倫理、家族、社会、国民道徳や国際倫理などの客観的道徳が存在するが、これらは何人かの自覚的自己、道徳的自己の創造的所産でありと考えることができる。これらに従う際にもこれに一方的に規制されるのではなく、これらを内面化し、主体化する必要がある、道徳は主観と客観との融合によるわれわれの主体的創造の所産である。

道徳は、歴史的・社会的現実生きる自己が主体的に創造された道であることから、歴史的・社会的現実や創造の主体に即して殊別性を帯びるが、創造の主体は単に個人的自己ではなく、自覚的自己、道徳的自己であり一般性、普遍性を帯びる。

(2) 道徳性

①道徳は、人間の自覚的自己と道徳的自己の所産であり、その所産をどのように個人がどのように受容、内面化するか、創造するか、についての研究をなされている。

人間の精神諸機能、認知 (cognition)、情意 (affect)、意志 (volition)、行動 (behavior) とその機能の統合体としての人格 (personality) の側面と道徳の殊別性-普遍性とから研究されている。

認知的側面については、ピアジェ (Piaget, 1932)、コールバーグ (Kohlberg, L. 1958)、レスト (Rest, J. 1979)、チュリエル (Turiel, 1983)、ヘイド (Haidt, 2001) などの研究がある。

情意的側面については、ホフマン (Hoffman, 1963, 2000 Hoffmans1967)、ギリガン (Gilligan, 1977)、ルイス (Lewis, 1971)、コチャンスカ (Kochanska & Thompson, 1997)、トムソンら (Thompson, R.A. & Newtow, W. 2010)、ロージンら (Rozin, Lowery, Imada & Haidt, 1999)、アイゼンバーグ (Eisenberg, 1982 Eisenbergs, 2010)、ノディング (Noddings, N. 2005) などの研究がある。

表 1 共感性の発達 (Hoffman, 1984)

段階	特徴
1	生後 1 年の間は自他が未分化である。
2	11、12 か月頃になると、他は一定不変な存在であり、自分とは異なった身体的実在であるという認識が生まれる。
3	2、3 歳頃になると、それぞれが別個の内的状態をもつことを漠然と理解するようになる。
4	8-12 歳頃になると、それぞれが独自性と生活経験をもっていることを認識する。

行動的側面については、アイゼンク (Eysenck, H. 1976)、ヤバンデューラ (Bandura, A. 1986, 2002) などの研究がある。

人格的側面については、ペックとハーヴィグハースト (Peck & Havighurst, 1960)、オールポート (Allport, 1955)、ブラッシー (Blasi, A. 1984)、ホーガン (Hogan, 1973)、レビンガー (Loevinger, 1976)、アイゼンバーグとマッセン (Eisenberg & Mussen, 1989) や澤田 (1983) などの研究がある。

これらの研究は、道徳的問題において人間の主要な精神機能に焦点を当て研究、理論化している。道徳の問題で他の精神機能の作用、個人差や他者との相互作用についての研究も、コールバーグの正義的共同体のプログラム (Just Community, 1989)、ナバエツら (Narvaez) の共同体価値と性格教育 (Community Value and Character Education, 1999)、セルマンら (Selman & Walker, 1993) の愛と自由の声 (Voice of Love and Freedom) やデーモンの若者チャーター (Damon, 1997) がある。

道徳の殊別性-普遍性の問題については、歴史的・社会的現実生きる個人が、普遍的な道徳どのように受容していくかが研究されている (ピアジェやコールバーグの正義的道徳)。しかし普遍的な道徳では処理できないような問題にどのように対処していくかについて普遍的道徳を再検討し、再創造しようとする立場がある (Gilligan, 1982, Selman & Walker, 1993, Gibbs, J. 2010)。これは、また政治学 (たとえばリベラリズム対コミュニタリアニズム)、経済学 (分かち合いの経済学—神野 2010—)、哲学 (公共哲学—Sandrel, 2005 山口 2003) においてもなされている。政治学や経済学は国民の福祉を寄与する学問であり、殊別的問題を対象にしているが、現実には必ずしも国民の福祉が得られない状況の分析により現実での道徳を再検証しようとしている。哲学は人間の私的な内実を探求してきたが、政治、経済的状况で普遍的な道徳を希求することが困難になり、公的な面との相互作用で私的な内実を探求する動きがみられる。

道徳性の神経生理学的な研究も開始されている。

著者は、道徳性発達、形成を理解するため、5 つの構成要素による MPEB モデルを提唱した (Ohnishi, 1992, 2006)。1. 道徳的理想 (Moral Ideal) : 理想とする事態についての理解、認識、創造への意欲。2. パーソナリティ (Personality) : 個人内、個人間から生じる認知的、情動的、意志的経験を統合する個人。3. 環境 (Environment) : 個人の生きる物理的、社会的、文化的、歴史的環境からの影響、またはそれらへの作用。4. 認知 (Conception) : 個人内、個人間の事象の認識。5. 生物学的 (Biogenetic) : 生理的、発生的要因の影響

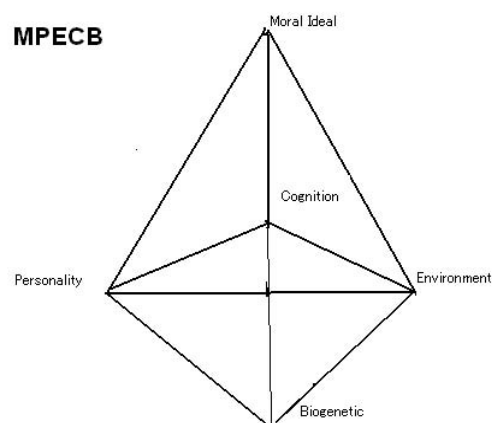


図 1 MPEB モデル (Ohnishi, 1992,)

道徳性形成においては、各構成要素に関連する下位の要素を認識し、それらを道徳的理想の達成のために、相互関連を考え、それらの要素を主体自ら、または他者の援助を得て配置することが必要である。このモデルは、道徳性の発達の促進や阻害を理解する際には有効である。道徳的

価値についての理解、認知にのみではなく、パーソナリティの構成要素としての価値への自我関与、その実現を阻害するパーソナリティや環境的構成要素の理解によってのみ、道徳性が形成されることができる。

上述の概観から、道徳性を自他の福祉に資する人格的能力特性として考えることができる。

### ②道徳性形成プログラム

前項で、道徳的主体の存在する社会環境での道徳生性形成プログラムが提唱されていることを述べた（コールバーグの正義的共同体プログラム、ナバエツらの共同体価値と性格教育、セルマンらの愛と自由の声プログラムとデーモンの若者チャータープログラムなど）。

ここでは道徳性形成道徳性の情動と認知の統合と経済的、社会的状況での殊別的 - 普遍的な道徳性の形成を目指したプログラムであるセルマンらの愛と自由の声のプログラムについて見てみる。

道徳性発達において、個人の生きる社会、家族、友人と共同体における関係での道徳を認識し、感じ、そしてそれらを統合していくことが重要である。情動的（情動的技能）、認知的（観点取得と交渉技能）と倫理的（愛と自由）能力を統合し、均衡化し、発達することが重要であると仮定されている。この仮定は、サリバンの対人関係理論に基づいた子どもの対人的関係の治療経験によっている（ペア・セラピー pair therapy, 1990）。それは、単に対人的な関係状況に順応するだけや関係を巧く確立、維持するだけでなく、子どもの自律性をも発達、形成することを志向するものである。子どもの臨床的な経験を、さらに広い人間関係、社会関係での道徳性発達、形成の志向を目的にしたプログラムを開発していた。

人間においての根源的価値なものは、他者との関係の価値である愛（Love）と自己自律性を表わす自由（Freedom）である。それらは、各文化、共同体、家族、友達の関係内で異なって表現されて、定義されが、その重要性は普遍的に認識されている。

これらの価値が児童期から青年期までの人間関係と個人内で情動的技能、観点取得技能、対人的交渉技能、愛と自由の発達が示された。以下課題での対象年齢の発達段階での各技能の特徴は以下のようなものである。

### 児童初期／就学前（年齢：3-6 歳、就学前から小学校 1 年生頃）

- 1) **情動的技能**：自己の感情を表出する。広範囲な情動の表現である。子どもは、未だ自己の感情と思考が他者とのどのように違うかについての自意識的覚知がないが、可能な限り多くの感情を表現できる。
- 2) **観点取得技能**：意識すること。社会的観点取得に關すると同様に、子どもは自身の観点が他者の観点とは異なっているという意識はなく、自分の観点和他者の観点を分化できない。
- 3) **対人的交渉技能**：衝動的な抗争や逃走で葛藤を解決する。自己の観点和他者の観点を分化できないので、子どもは葛藤解決では限られた能力しか持っていない。この段階では、葛藤は普通、抗争または逃避方略で解決される。身体的に他者を服従を強いたり、他者の願望を身体的に受容されるのを強いられたりする、葛藤の身体的解決が強調される。これは、他者と一緒になる、または分かれるかの形態を取る。
- 4) **愛**：他者と一緒に居ることを享受する。他者と一緒に居ることを享受することである。家族

内での安全な愛着に基づくと年少児は、友達との関係で喜びと快を経験し始める。明白な自己分化は無いが、同輩と情動を共経験することができる。さらに、この喜びを言ったり、可能にすることが快的な経験を通して新しく形成された同輩関係を安全にするのに役立つ。安全な関係での喜びの経験は、後の愛の十全な発達的基础となる。

5) **自由**：未だ自己の意識的覚知を発達していないが、情動的、認知的、身体的、言語的に自身を発達させることを積極的に学習している。自由は初めは、他者と世界との関係でのこの能力感に基づいている。自由は、情動的、観点取得的、交渉技能とこの期に発達する他の多くの重要な技能を含んでいる。

### 児童期／小学校（年齢：5-9 歳、年中から 4 年頃）

1) **情動的技能**：自己の感情を命名する。正確に自己の感情を同定することを学習する情動的語彙の発達により、年少児は自己の感情を討論することができる。自己の観点が他者の観点とどのように異なるかの一人称的理解の発達につれて、自己の感情を命名する能力を発達させ、他者の感情とどのように異なるかを覚知するようになる。自己の感情を命名する能力は、葛藤がどのように拡大するかの理解の鍵的な構成要素である。

2) **観点取得技能**：自身の観点の自身で覚知する。一人称的観点の発達である。子どもは自身の感情と思考を他者とは異なるものとして自己覚知するようになる。能動的に自己を表現する際に一人称の陳述を使う。自己意識した”私”観を発達させる。私はそれが欲しい。私はこう感じる。私はそれを知っている。そして、自分の主観的志向が他の者とは異なることを覚知する。しかし、未だ他者の観点を理解することはできない。

3) **対人的交渉技能**：一方的な命令または服従による葛藤を解決する。葛藤状態で、子どもは葛藤を解決するために身体的抗争や逃避的反応から意志力の使用へと成熟する。一人称的覚知は一人の子どもが命令をだし、他の子どもがそれに服従する能力と一致する。両方の子どもは他の”私”を支配したり、それに屈服できる一人称の”私’を持っている。ここで鍵となる差異は身体的解決と意志解決力の差異である。この初期の”私”の主張は、個人の力や屈伏させることによって勝手に振る舞ったりして発達する。ここでの目標は、子どもが葛藤の解決に別な方法があることを認識することである。さらに、他の者を自分の方法でいつもさせることは関係の崩壊に至る。むしろ、時には自分が勝手に振る舞い、他の時には他人が勝手に振る舞う。命令することと命令されることの柔軟性が、より健全な関係と個人の発達を促進する。

4) **愛**：他者に配慮する。他者との関係で喜びを経験し得ることに基づいて、愛の倫理的発達の次の段階は、他者への思いやる能力である。子どもの感情が他の子どもの感情に影響される様な場で子どもが他者と経験し始める換情的な情熱にうち建てることで、目標は他者への思いやり観を発達し始める。子どもはなお他者の二人称的覚知を発達させてはいないが、他の子どもの情動を共感でき、他者への一方的反応ができる。関係を持っている他者を思いやることは第一義的にその者を感じ、情意を表わすことである。苦痛の状況では、それは快的な方法で他者の苦悩に反応しようとすることを意味している。他者の感じている快または苦痛に影響されて、子どもは自身の情動、思考と行為での変革によりこれらの感情に反応し始める。

5) **自由**：自己自身を価値づける。自身を価値づけ、評価することを学習する。“私”観を発達す

るのを学習する一人称的観点の発達に対応する自己の価値の覚知と感情の発達がある。

### (3) 道徳性発達教育

ここでは、幼稚園、保育所及び学校でどのような道徳性発達教育、道徳教育がなされているかを、それぞれの保育所指針、幼稚園教育要領、学習指導要領を以下概観する。

#### ①保育所

保育所指針での保育の目標は以下の通りである（保育所保育指針 平成 20 年 厚生労働省）

#### 3. 保育の原理

##### (1) 保育の目標

**ア** 保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。

- (ア) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満ちし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。
- (イ) 健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。
- (ウ) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。
- (エ) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。
- (オ) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。
- (カ) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。

**イ** 保育所は、入所する子どもの保護者に対し、その意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、保育所の特性や保育士等の専門性を生かして、その援助に当たらなければならない。

#### 2章 子どもの発達

子どもは、様々な環境との相互作用により発達していく。すなわち、子どもの発達は、子どもがそれまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得していく過程である。特に大切なのは、人との関わりであり、愛情豊かで思慮深い大人による保護や世話などを通して、大人と子どもの相互の関わりが十分に行われることが重要である。この関係を起点として、次第に他の子どもとの間でも相互に働きかけ、関わりを深め、人への信頼感と自己の主体性を形成していくのである。

これらのことを踏まえ、保育士等は、次に示す子どもの発達の特性や発達過程を理解し、発達及び生活の連続性に配慮して保育しなければならない。

その際、保育士等は、子どもと生活や遊びを共にする中で、一人ひとりの子どもの心身の状態を把握しながら、その発達の援助を行うことが必要である。

##### 1. 乳幼児期の発達の特性

(1) 子どもは、大人によって生命を守られ、愛され、信頼されることにより、情緒が安定するとともに、人への信頼感が育つ。そして、身近な環境（人、自然、事物、出来事など）に興味や関心を持ち、自発的に働きかけるなど、次第に自我が芽生える。

(2) 子どもは、子どもを取り巻く環境に主体的に関わることにより、心身の発達が促される。

(3) 子どもは、大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる。この相互の関わりを通じて、身体的な発達及び知的な発達とともに、情緒的、社会的及び道徳的な発達が促される。

(4) 乳幼児期は、生理的、身体的な諸条件や生育環境の違いにより、一人ひとりの心身の発達の個人差が大きい。

(5) 子どもは、遊びを通して、仲間との関係を育み、その中で個の成長も促される。

(6) 乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期であり、特に身体感覚を伴う多様な経験が積み重なることにより、豊かな感性とともに好奇心、探究心や思考力が養われる。また、それらがその後の生活や学びの基礎になる。

第 2 章には 6 か月未満から 6 歳まで子どもの発達過程が示されている。幼稚園児の対応する年齢での発達過程は以下様に示されている。

### (1) おおむね4歳

全身のバランスを取る能力が発達し、体の動きが巧みになる。自然など身近な環境に積極的に関わり、様々な物の特性を知り、それらとの関わり方や遊び方を体得していく。想像力が豊かになり、目的を持って行動し、つくったり、かいたり、試したりするようになるが、自分の行動やその結果を予測して不安になるなどの葛藤も経験する。仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。

### (2) おおむね5歳

基本的な生活習慣が身に付き、運動機能はますます伸び、喜んで運動遊びをしたり、仲間とともに活発に遊ぶ。言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。さらに、遊びを発展させ、楽しむために、自分たちで決まりをつくったりする。また、自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。他人の役に立つことを嬉しく感じたりして、仲間の中の一人としての自覚が生まれる。

### (3) おおむね6歳

全身運動が滑らかで巧みになり、快活に跳び回るようになる。これまでの体験から、自信や、予想や見通しを立てる力が育ち、心身ともに力があふれ、意欲が旺盛になる。仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。様々な知識や経験を生かし、創意工夫を重ね、遊びを発展させる。思考力や認識力も高まり、自然事象や社会事象、文字などへの興味や関心も深まっていく。身近な大人に甘え、気持ちを休めることもあるが、様々な経験を通して自立心が一層高まっていく。

目標 (ウ) で「人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にできる心を育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。」で道徳性発達指導について触れられている。

4 歳児では、「仲間とのつながりが強くなる中で、けんかも増えてくる。その一方で、決まりの大切さに気付き、守ろうとするようになる。感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを抑えられたり、我慢ができるようになってくる。」、5 歳児では、「仲間とともに活発に遊ぶ。言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。さらに、遊びを発展させ、楽しむために、自分たちで決まりを作ったりする。また、自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身に付けていく。他人の役に立つことを嬉しく感じたりして、仲間の中の一人としての自覚が生まれる。」、そして 6 歳児では「仲間の意思を大切にしようとし、役割の分担が生まれるような協同遊びやごっこ遊びを行い、満足するまで取り組もうとする。」と、各年齢段階での道徳性の発達を記述し、その指導の必要性を論じている。

## ②幼稚園

目標が心身の健康に関する領域「健康」、人とのかかわりに関する領域「人間関係」、

身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」に分けられている

道徳性に関係する領域は、人とかかわりに関する領域である人間関係の領域であり、ねらいと内容は以下の記述されている(幼稚園教育要領 平成 20 年 文部科学省)。

他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかる力を養う。

**1 ねらい**

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

**2 内容**

- (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
- (2) 自分で考え、自分で行動する。
- (3) 自分でできることは自分でする。
- (4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
- (5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- (6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- (7) 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- (8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。
- (9) よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。
- (10) 友達とかかわりを深め、思いやりをもつ。
- (11) 友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。
- (12) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。
- (13) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。

ねらいの(2)及び(3)は道徳性に関連するものであり、内容も道徳性の基礎的な能力や自他の関係に基づく道徳性の発達を目指している。

**③小学校**

学習指導要領での道徳について以下のように記載されている(内容については第 1 学年及び第 2 学年についてのみを記載する(小学校学習指導要領 文部科学省 平成 20 年))。



### 第 1 目標

道徳教育の目標は、第 1 章総則の第 1 の 2 に示すところにより、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。

道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成するものとする。

### 第 2 内容

道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の内容は、次のとおりとする。

#### 〔第 1 学年及び第 2 学年〕

1. 主として自分自身に関すること。
  - (1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。
  - (2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。
  - (3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。
  - (4) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。
2. 主として他の人とのかかわりに関すること。
  - (1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。
  - (2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。
  - (3) 友達と仲よくし、助け合う。
  - (4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。
3. 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。
  - (1) 生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。
  - (2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。
  - (3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。
4. 主として集団や社会とかかわりに関すること。
  - (1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。
  - (2) 働くことのよさを感じて、みんなのために働く。
  - (3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。
  - (4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。
  - (5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。

これらの内容での道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うことを目的にしている。さらに自己の生き方での価値のあり方を探求することを求めていると言える。さらに、自己の生き方にどのように他者が関わり、将来の日本、あるいは世界の発展に関わるかについての探究、実践意欲を育成の方向性をも探求する知的、人格的能力育成へと進めるべきである。

## 3. 情報モラルと道徳性

情報モラルについて考える際には、情報の内容、媒体および情報過程の様態における個人からモラルを考えることが必要である。個人の受ける情報内容、情報媒体と様態(対面的 - 非対面)は多様である。

情報モラル指導のための授業実践事例に関する調査研究委員(平成 17 年)の情報モラルの指導サポートセンターの項目には、形式(チャット・掲示板、WWW、メール、その他)と指導内容(個人情報保護、ネチケット、セキュリティ・ウイルス、著作権、その他)の関係マトリックスで情報モラル授業のサポートをしている。

また National Center for Teacher Development(2006)では以下のような項目を扱っている。Web ページ、 Web 発信、悪質商法、会員登録、携帯電話、健康問題、交流サイト、コンピュータウイ

ルス、ショッピング、対人関係、著作権、デマ情報、なりすまし、不正アクセス、迷惑メール、メールバトルのテーマを扱っている。

特定少数の送り手が、何らかの情報を不特定多数の受け手に向けて伝達する際に用いられる（マスメディア）に対して特定の受け手への伝達、マスメディアに媒介された情報伝達を、1点を発信源とし多数の点を到達点とする構造（ネットワークメディア）に対して到着点を限定する伝達、主に使い手が情報を発信したり、記録、編集したりするために用いられるもの（パーソナルメディア）、メディアの特性として、インタラクティビティ、双方向性など。テレビ番組の内容などは、受信者にとどまるが、電話の場合には関係する者の双方が会話を打ち切ったりすることで情報のある程度選択する可能である。送り手と受け手の立場に立つことができ、両者の間での情報の一方的な伝達されるのではなく、「双方向メディア」または「インタラクティブメディア」など、受け手と送り手が同時にコミュニケーションに関わっていることを要求される情報過程（同期と非同期型）、情報の種類（文字、音声、映像、動画、文字などを送るのに用いることができるマルチメディアメディアなど情報媒体は多様であるが、情報過程における構成要素を十分に認識することが必要である。

情報過程には、情報の送信者と受信者が関与する(Barger,R. 2008. Martin,S. 2010)。送信過程における送信者の意図と受信者への効果と受信過程における送信者の意図の認識的、道徳的判断、精査能力の育成が必要である。

研究対象としている幼稚園の年少児やその年齢の保育園児について、保育所指針や幼稚園教育指導要領では情報社会での園児の発達の記述やその対処法について論究はされていない。日常的に園児達は、情報社会から隔離されているのではない。日常での意見交換、主張、家庭でのテレビ視聴、通園時での諸情報に接しているものであり、これらからの情報を受け、影響されていることを認識する必要がある。

小学校学習指導要領の道徳において、情報に関する記載は 第3指導計画の作成と内容の取扱いの3 道徳の時間における指導に当たって配慮すべき事項に(5)に「児童の発達の段階や特性等を考慮し、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえ、情報モラルに関する指導に留意すること。」で触れられているだけである。道徳性は、個人の存在する現在、将来の社会や世界と密接に関連することから、情報場面や事象から隔離した社会、世界での道徳性育成だけでは考えることはできない。

#### 4. 結論

幼児・児童の社会的現状と教育現状を概観したが、必ずしも幼児・児童の現在および将来の対処について十分ではない。人間交流場面や情報社会での情報の送信者としてのモラルとその受信者としてのモラルの観点から育成する必要がある。それらは、相互的、補完的なものであり、道徳的な理想との観点から絶えず精査し、改善すべきである。

幼児・児童の能力育成、保護者および現職保育者・教員の指導能力育成教育システムおよび保育者・教員の志望者(学生)を対象とした指導能力育成教育システムについて考えることにする。それぞれにおいて、情報の送信者としてのモラルとその受信者としてのモラルを別個に育成し、ある段階においてはそれを統合育成することが必要である。

### 1) 幼児・児童の能力育成システムについて

情報送信者のモラル：自己が発した情報が、受け手がどのように状態になったか理解する能力育成が重要であり、更に受け手の福祉を改善する努力に育成が重要である。

段階 1：自己が発する諸情報について知る。

段階 2：それが受信者の他者にどのように影響したかを知る。

段階 3：送信者と受信者の立場を交換して、受信者の受けた影響について考える。

段階 4：自己の情報を発信する際に受信者（他者）の福祉に資するのにどのようなことを考えればよいかを考える。

情報受信者のモラル：自己の受ける情報について、情報を発信する者の意図を理解、推論する能力が重要である。

段階 1：発信される諸情報、情報源について知る。

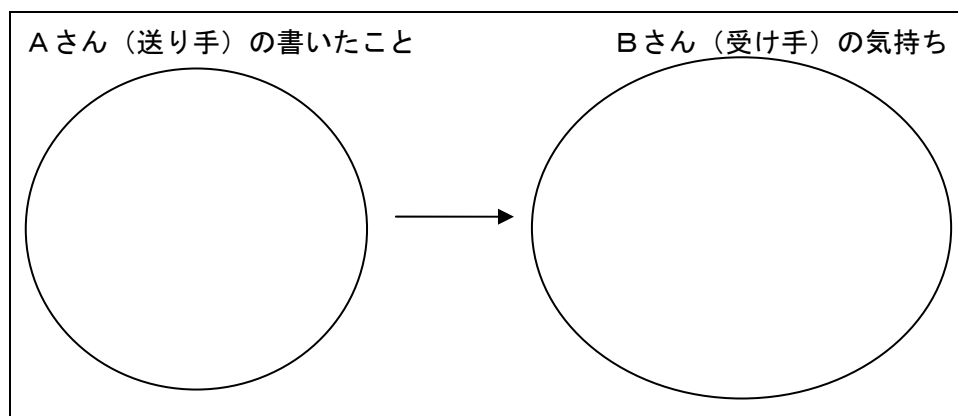
段階 2：情報送信者の意図を理解し、判断する。

段階 3: 受信した情報が自己の福祉に資するためにどのようなことを考えたらよいかを知る。

各段階 1 は、情報環境の覚知であり、以下の段階は情報媒体種、または既知 - 未知に依って指導される段階である。発信者として主に形成されるべき道德性では、観点取得能力、共感性、向社会的能力である。受信者として主に形成されるべき道德性は、受信情報の道德的判断力である。それらは、情報環境での情報過程の位置において主要な道德的能力であり、相互関連的能力である。

段階での指導において、幼児、児童らの活動家の工夫が必要であり、移動可能なワイヤレスインタラクティブパネル（UPIS-56M PLUS 製）の導入で、課題を提示し、幼児、児童が能動的に道德的活動できる。

例：情報送信者のモラル段階 2、3 では、パネル上に下図の A さんの立場から B さんに手紙を書かせる。次に受け手の B さんのそれを受けた際の気持ちを、記述させる。この方法で、参加児童が、表示された感情の多様性に気付かせ、共有することが容易になる。



パネルを使用しない時には床に円（又は足）を書いて、送り手の円から送り手に口頭で話す方法も可能である。

### 2) 保護者および保育者・教員の指導能力育成教育システムの構築について

情報送信者のモラル：幼児、児童（保育者・教員）や我が子（保護者）が発する情報が、受け手がどのように状態になったか理解する能力を育成が重要であり、更に受け手の福祉を改善する

努力に育成が重要である。

段階 1：子どもの発する諸情報について知る。

段階 2：それが他者にどのように影響したかを知る。

段階 3：送信者と受信者の立場を交換して、受信者の受けた影響について考える。

段階 4：子どもが情報を発信する際に受信者（他者）の福祉に資するのにどのようなことを考えればよいかを考える。

情報受信者のモラル：幼児、児童（教師）や我が子（保護者）が受ける情報について、情報を発信する者の意図を理解、推論する能力が重要である。

段階 1：情報過程についての理解。

段階 2：子どもの発信する諸情報、情報源について知る。

段階 3：情報送信者の意図を理解し、判断する能力を育てる。

段階 4：受信した情報が子どもの福祉に資するためにどのようなことを考えたらよいかを知る。

各段階 1、2 は、子どもの情報環境の覚知であり、以下の段階は情報内容、媒体種、または既知 - 未知、興味・関心に依って個別、総合的に指導される段階である。第 2 段階以降は、幼児、児童や我が子の反応を受容し、自他の福祉に資するように方向づけすることが必要である。技法としては理性的、誘導的な統制が有効である（ホフマン 1963）。

ワイヤレスインタラクティブパネルの導入で、それぞれの段階での子どもの反応特徴を記載することで、それらを共有でき、有効な育成法を発見できる。

### 3) 保育者・教員の志望者（学生）を対象とした指導能力育成教育システムの構築について

情報送信者のモラル：幼児、児童が発した情報が、受け手がどのように状態になったか理解する能力育成が重要であり、更に受け手の福祉を修復、改善する努力の育成が重要である。

段階 1：情報過程について知る。

段階 2：子どもの情報環境について知る。

段階 3：それが受信者の他者にどのように影響したかを知る。

段階 4：送信者と受信者の立場を交換して、受信者の受けた影響について考える。

段階 5：子どもが情報を発信する際に受信者（他者）の福祉に資するのにどのようなことを考えればよいかを考える。

情報受信者のモラル：自己の受ける情報について、情報を発信する者の意図を理解、推論する能力が重要である。

段階 1：情報過程について知る。

段階 2：子どもの情報環境について知る。

段階 3：送信者の受けた影響について考える。

段階 4：子どもが情報受信する際に自己の福祉にどのように資しているかどのように考え、対処すればよいかを考える。

各段階 1、2 は、子どもの情報環境の覚知であり、以下の段階は情報媒体種、または既知 - 未知に依って指導される段階である。第 2 段階以降は、前項で述べたように幼児、児童の反応を受

容し、自他の福祉に資するように方向づけする誘導的な統制（ホフマン、1963）が有効である。

最後にこれらの情報を共有する場として、それらのシステムの実行経過を評価した情報を地区および地区を超えた共有する機関の設置が望ましい。

## 5. 文献

- Allport,G. (1955) *Becoming* New Haven:Yale University Press(人間の形成—人格心理学のための基礎的考察— 豊沢登訳 1959 理想社)
- Bandura,A. (1986) *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood, N.J.: Prentice.
- Bandura,A. (2002) Selective Moral Disengagement in The Exercise of Moral Agency. *Journal of Moral Education*, 31, 101-120.
- Barger,R. (2008) *Computer Ethics*. NY:Cambridge University Press
- Blasi, A. (1984) Moral identity: Its role of self in moral functioning. In W. M. Kurtines & J. L. Gerwitz (Eds. ), *Morality, moral behavior and moral development*, New York:Wiley.
- Damon, W. (1997) *The Youth Charter: How communities can work together to raise standards for all our children*. New York: The Free Press.
- Damon, W. (2008) *The path to purpose*.New York,NY: Free Press
- Eisenberg, N. (2010) *Empathy-Related Responding:Links with Self-regulation,Moral Judgment, and Moral Behavior*.In Mikulincer,M., & P.R.Shaver(Eds.), *Prosocial Motives,Emotions, and Behavior*.Whashington,DC:American Psychological Association
- Eisenberg,N.,Guthrie,I.K.,Cumberland,A.,Murphy,B.C.,Shepard,S.A.,Zhou,Q.,&Carlo,G. (2002) *Prosocial Development in Early Adulthood :A Longitudinal Study*. *Journal of Personality & Social Psychology*,82,693-1006
- Eisenberg. N.& Mussen、P.H.(1989)*The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press (菊池章夫・二宮克美訳 1991 思いやり行動の発達心理。金子書房)
- Eysenck, H. (1976) *The Biology of Morality*. In Lickona,T.(Ed.), *Moral Development and Behavior: Theory, Research, and Social Issues*. New York : Holt.
- Gilligan,G. (1977) *In Different Voices: Psychological Theory and women's development*. Harvard University Press(岩男寿美子監訳 1986 もうひとつの声。川島書店)
- Haidt, J. (2001) *The Emotional Dog and Its Rational Tail : A Social Intuitionist Approach to Moral Judgment*. *Psychological Review*, 108, 814-834.
- Hoffman、M.L. (1963) *Child rearing practice and moral development: Generalizations from empirical research*.*Child Development*, 34, 295-318.
- Hoffman,M.L. & Salzstein,R.D.(1967)*Parent Discipline and The Child's Moral Development*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 45—57.
- Hoffman, M. L. (2000) *Empathy and Moral Development: Implications for Caring and justice*. Cambridge. Cambridge University Press.

- Hogan, R. (1973) Moral conduct and moral character: A psychological perspective. *Psychological Bulletin*, 79, 217-232.
- Gibbs, J. (2010) *Moral Development & Reality*. 2<sup>nd</sup> ed.; Beyond the Theories of Kohlberg and Hoffman. Boston, MA: Allyn & Bacon
- 神野直彦 (2010) 「分かち合い」の経済学 岩波書店
- Kochanska, G., & Thomson, R.A. (1997) The Emergence and Development of Conscience in Toddlerhood and Early Childhood. In Grusec, J. E., & Kuczynski, L. (Eds.) *Parenting and Children's Internalization of Values*. New York: Wiley.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針
- Lewis, M. (1971) *Shame and Guilt in Neurosis* New York: International University Press.
- Loevinger, J. (1976) *Ego development: Conceptions and theories*. San Francisco: Jossey.
- Martin, S. (2010) The Internet's ethical challenge. *Monitor on Psychology*. Vol.41 No 732-35. Washington, DC: American Psychological Association
- 正木正 (1960) 道徳教育の研究 金子書房
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領
- National Center for Teacher Development (2005) (<http://www.nctd.go.jp/cgi-bin/namazu.cgi?query=%8F%EE%95%F1%83%82%83%89%83%8B&whence=0&reference=of>)
- Narvaez, D., Bebeau, M.J. & Thoma, S. (1999) *Community Value and Character Education*. Unpublished. Minnesota University
- Noddings, N. (2005) *The Challenge to Care in Schools*. NY: Teachers College Press.
- Ohnishi, F. (1992) The Role of Planning in Moral Development. In Kurtines, W. M., & Gewirtz, J. L. (Eds.), *Handbook of Moral Behavior and Development*. Vol.3. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Piaget, J. (1932) *Le jugement moral chez l'enfant* (大伴茂訳 1954 児童道徳判断の発達。同文書院)
- Peck, R.F. & Havighurst, R.J. (1960) *The psychology of character development*. New York: Wiley.
- Power, F. C., Higgins, A., & Kohlberg, L. (1989) *Lawrence Kohlberg's Approach to Moral Education*. NY: Columbia University Press.
- Rest, J. (1979) *Development of Judging Moral Issues*. Minnesota: University Minnesota Press. Morality, Wiley
- Rest, J., D. Narvaez, Bebeau, M. J. & Thoma, S. J. (1999) *Postconventional moral thinking: A Neo-Kohlbergian Approach*. Mahwah, NJ: Erlbaum
- The CAD Triad Hypothesis: A Mapping Between Three Moral Emotions (Contempt, Anger, Disgust) and Three Moral Codes (Community, Autonomy, Divinity). *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 574-586.
- Selman, R.L. & Shultz, L.H. (1990) *Making A Friend in Youth: Developmental Theory and Pair Therapy*. Chicago: The University of Chicago Press (大西文行監訳 1996 ペア・セラピー: どうしたらよいともだち関係が出来るか。I巻 北大路書房) .
- Selman, R., Walker, P., Chyng Sun et al. (1994) *Teacher Training Module For Voice of Love and*

Freedom. Unpublished paper. Boston: Friend, Family and Community (大西文行訳 1995. 「愛と自由の声」教師訓練書。未公刊 横浜市立大学)

Shweder, R.A., Much, N., Mahapatra, M., & Park, L. (1997) The big three of morality (autonomy, community, divinity), and the big three of suffering. In A. Brandt & P. Rosin (Eds.), *Morality and health*. New York: Routledge

Sandel, M. J. (2005) *Public Philosophy*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

澤田慶輔 (1983) 道徳教育 創価大学出版会

Shweder, R. A., Mahapatra, M., & J. G. Miller. (1987) Culture and moral development. In J. Kagan & S. Lamb (Eds.), *The emergence of morality in young children*, Chicago: University of Chicago Press.

Turiel, E. (1983) *The development of social knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press.

Thompson, R.A. & Newtow, W. (2010) Emotion in Early Conscience. In Arseni, W.A. Lemerise, E.A. (eds.) *Emotions, Aggression and Morality in Children 13-31*

山口定 (2003) 新しい公共性を求めて 山口定、佐藤春吉、中島茂樹、小関素明編 新しい公共性。有斐閣